



はじめに

東京の観光名所としても知られる浅草寺は、古くから観音霊場として信仰を集めてきました。その本堂である観音堂は、慶安2年(1649)に再建されて以来、火災を免れてきたといえます。

大正12年(1923)9月に発生した関東大震災による火災においても、浅草区(現東京都台東区の東部)では9割以上が焼失したにも関わらず、浅草寺の観音堂、五重塔、仁王門(宝蔵門)および伝法院は焼け残りました。

一面の焦土のなか、なぜ浅草寺のこれらの建物は焼け残ったのでしょうか。それは奇跡ともいわれ、人々の中には、境内のイチヨウが水を吹いて火を消していたと不思議なことを語る者も現れました。

イチヨウが水を吹いた

関東大震災は、正午前という炊事が行われる時間帯に発生したこともあり、火災が多発し被害を拡大させま

水道消火栓が設置されるなど、震災前から防火対策が施されてきました。

また本書には防火用にイチヨウを植え付けたとも記されています。実は、関東大震災では公園や広場の樹木が防火壁となった事例が多く報告されており、浅草寺においても境内の木々が防火に効果的であったと考えられるのです。



全焼した仲見世の先に、焼け残った仁王門と五重塔が見える。現在、五重塔は再建されて観音堂の左側に建っているが、当時は右側に建っていた
(出典:『関東震災画報 第一輯』 大阪毎日新聞社 1923年)

樹木による防火の事例

例えば、避難した約2万人の命が救われた岩崎家深川別邸(現・清澄庭園)の周囲は土堤で囲まれており、その上にはシイノキなどが密生する植え込みがありました。また敷地内にはモミジやクロマツなどの樹林や池があり、炎に正面から攻められながらも庭内の人々は無事でした。

対して、あまりにも残酷な結果を迎

浅草寺の水吹きイチヨウ

した。浅草区でも各所で黒煙が上がり、たちまち辺りは火の海となりました。

炎に追われた人々の避難先となったのは公園や広場でした。当時、「浅草公園」という名称の都市公園となっていた浅草寺にも、多くの人が避難しました。その数は10万人ともいわれています。

しかし、ここならば大丈夫だと安堵したのも東の間のことでした。浅草千束町で発生した火災が、強風に煽られて延焼を拡大させながら浅草寺に迫ったのです。

境内は騒然となりました。四方を炎に囲まれて、もう逃げることもできません。すでに炎は仲見世を焼き、間近から火の粉を降らせています。

イチヨウが水を吹いたとされるのは、この渦中のことでした。震災の翌月に出版された『大正大震災大火災』には、このとき境内に避難していた人々の間で「堂を掩う大銀杏から龍吐水のように水を吹き出して、本堂に燃えかかる火焔を消していた」、また「猛火中境内の樹々の枝から盛んに雨を降らした」

えてしまったのが、陸軍被服廠跡(現・横綱町公園)です。この地は東京市による整備が予定されていましたが、当時は樹木のない空地で、区域の境界に鉄骨を組んだ板塀と溝があるだけでした。この地では、避難していた約4万人のうち、発生した火災旋風に襲われて3万8千人もの命が失われました。

両地はほぼ同面積でしたが、大きく明暗が分かれたのは「樹木の有無」が関係しているといわれています。

公園・広場・樹木

復興事務局編『帝都復興事業誌 建築篇・公園篇』では、宮城前広場、上野公園、日比谷公園などで、広域にわたる公園や広場の植樹帯が防火壁となつた焼け止まりがみられるとし、浅草公園については、「局部的に効果があつた」としています。

浅草公園内にはイチヨウのほか、シイノキ、ケヤキ、クロマツ、アカマツ、スギ、ヒノキ、カエデ、サクラ、シラカシ、アカガシ、ヤナギ、ヤツデ、アオキ、コウヤマキがあつたとされ、その樹林地は、観音堂の付近に集中していました。そのため焼け止まりも局部的となったのです。

浅草寺では空地があつたことに加え、これらの樹木が防火壁となつて人々の命を守る役割を果たしました。大正13年(1924)、『土木学会誌』に掲載された調査報告「火災と樹林並に樹木との関係」には、「最も危険なる五重塔及観音堂の背面附近にはイチウ(イチヨウ)の大木多く幸に風上より之等の建築物を保護せし」と記述されています。

などと語られていたことが記されています。

その真偽は定かではないとしても、浅草寺は危機を脱することができ、焼失を免れたことで多くの命が救われました。



『大正大震災大火災』 (大日本雄弁会・講談社 1923年)

他所にもある水吹きイチヨウ

浅草寺のみならず、イチヨウが水を吹いたという伝説は他所にもあり、京都では、その枝ぶりから「逆さイチヨウ」とも呼ばれる西本願寺の大イチヨウが、天明8年(1788)の大火で炎が迫った際に、水を吹き出して伽藍を護つたと伝えられています。また、本能寺のイチヨウも同じく天明8年の大火で水を吹き出し「火伏せのイチヨウ」と呼ばれ

公園や広場、樹木の防災における重要性が認められたことは、震災を受けて始動した帝都復興事業にも大きく反映されました。この事業で、東京には3カ所の大公園と、小学校に隣接した52カ所の小公園が建設されました。また、4万3000超の街路樹を植樹するとし、樹種にはイチヨウ、アオギリ、ハシケンボク、シンジュ、エンジュ、サクラなどが選ばれました。



観音堂裏のイチヨウ (出典:『震災予防調査会報告 第百号 戊』 震災予防調査会 1925年)

樹木の防火機能

さて、このように樹木に防火効果があるのは事実として、それはどのような機能によるものなのでしょうか。

樹木には樹冠や幹が熱や火の粉を遮る「遮断力」と、延焼に耐える「耐火力」があり、この二つの力が働くことによつて防火効果が発揮されるといわれています。

また樹木などの植物には、根から吸い上げた水分を葉裏から水蒸気として放出し、葉の温度上昇を防ぐ「蒸散」という働きがあります。暑い季節

ています。

このような、イチヨウが水を吹くという現象は本当にあるのでしょうか。

焼失を免れた要因

浅草寺が焼失を免れたのには、実際には複数の要因がありました。

浅草寺には第五消防署浅草公園隊が消火に駆け付けたほか、境内では鳶頭で消防組頭の馬場斧吉の呼びかけで、避難者たちによりバケツリレーが行われるなど、必死の消火活動が続けられていました。

さらに、焼け残った地帯には防火上で有利だった点もありました。内務省社会局編『大正震災志 上』によると、明治17年(1884)に浅草公園内が一区から七区に区割りされた際、一区の観音堂に隣接していた建物を、防火上の危険があるとして六区へ移転させていました。これにより観音堂の周囲は空地となっていました。そして一区と二区、五区は防火地帯に指定され、家屋の高さや建坪に制限が課せられたほか、

に森林のなかに入ると涼しさを感じるのは、この水蒸気の放出によるものです。

さらに、消防庁消防研究所「水幕と樹木の併用による延焼防止向上効果に関する研究報告書」によると「火災から強い熱を受けると、樹木は水蒸気を放出する」とあり、そして輻射熱が強い場合には水蒸気は著しく放出されるが、その期間はわずか30秒〜60秒程度としています。イチヨウは特に水分含有率が高く、「水吹きイチヨウ」はこのような火災という条件下において、一時的に多量の蒸気が放出されたということなのかもしれません。それは、それだけ炎が至近に迫ったということであり、あらためて恐ろしさを感じずにはいられません。

おわりに

関東大震災の災禍に耐えた浅草寺でしたが、昭和20年(1945)3月の東京大空襲により、甚大な被害を受けました。長年にわたり護られてきた観音堂もついに炎上し、五重塔や仁王門も焼けてしまいました。けれども境内のイチヨウは、焼き尽くされることなく残りました。

炎に強いイチヨウですが、その起源は古生代にまで遡り「生きた化石」とも呼ばれています。幾多の時代を生きたイチヨウは、人々の生活をこく身近で見守ってくれているかのようにも思えます。

現在も、多くの参詣者で賑わう浅草寺の境内でイチヨウは静かに枝を拡げています。

(文：上原由子)